



【浪岡北畠氏】

浪岡北畠氏は、北畠顕家(きたばたけあきいえ)の末裔と伝えられ、16世紀半ば過ぎには、浪岡周辺・北津軽・外浜の北半分を領有していました。浪岡北畠氏がこの地で一定の勢力を保持し得たのは、室町幕府の仲介で、そして、長く対立関係にあり、檜山に移った下国安藤氏と南部氏との間で講和が成立し、両者の緩衝勢力としてその支配を委ねられたからともいわれています。また、檜山の屋形愛季(ちかすえ)と姻戚関係を結ぶほか、夷島の嘯崎(かきざき)氏とも強く結び合っていました。そして、京都の公家である山科(やましな)家を通じて叙爵任官し、「御所」の称号を許されていました。

は津軽家の祈願所となり、慶長19年(1614)には2代藩主信枚(のぶひら)によって社殿が再建されました。このときに奉納された棟札は、青森市の有形文化財に指定されています。

浪岡城 10

浪岡城は、昭和15年(1940)2月10日に県内初の国史跡として指定されました。城主の浪岡北畠氏は、南北朝時代に活躍した北畠顕家(あきいえ)の末裔と伝えられています。そして、15世紀のころに浪岡城を構築し、16世紀前半に最盛期を迎え、ここを拠点に津軽の北半分を領有していました。後に津軽の独立を果たした津軽(大浦)為信(つがるのおおうら)のためのぶ)によって攻められ、天正6年(1578)浪岡御所・北畠顕村は自害したと伝えられています。



王余魚沢(かれいざわ)城跡 11

現在稲荷神社となっている一帯が館跡とされています。浪岡城主北畠氏の家臣井源左衛門の居館とされていますが、その詳細は不明です。



元光寺の円空仏(観音菩薩坐像) 12

もともと梵珠山山頂の釈迦堂に安置されていました。像容の特徴から油川浄満寺像を造立直後の像とみられます。油川から弘前を経て秋田藩領へと向かう途中この地で彫った可能性が高いと考えられています。この像は髻(たぶさ)をあらわさない形式で、北海道江差町の観音寺や、浄満寺(油川)、秋田県鷹巣町の糠沢集落にある円空仏と共通しています。頭部に改修がみられ面貌に欠損もありますが、寛文7年(1667)ごろに津軽や下北で作られた円空仏に共通する特徴を顕しています。(青森県文化財保護課のHPを参照)円空仏の拝観には事前申し込みが必要です。



※青森市浪岡の玄徳寺は、戊辰戦争のとき、清水谷公考(箱館府知事)が陣を置いた。門前にはそのことを記念した石碑が建てられている。



清水谷総督の本營だった玄徳寺(昭和初年・玄徳寺蔵) 青森市市編さん室

西光院の円空仏(観音菩薩坐像) 13

もともと西光院の有力な檀家の仏壇に納められていました。そのためか、当初はあったはずの台座が削り落とされ、表面に塗りも施されています。とはいえ、津軽半島の円空仏と同じような作風で、やさしく笑みをたたえています。(青森県文化財保護課のHPを参照)円空仏の拝観には事前申し込みが必要です。



美人川伝説 14

浪岡の羽黒平に羽黒神社があり、その傍らの清水の流れ出す一帯が「美人川公園」になっています。この地に次のような伝説があります。「京都の近衛閑白に、福姫と言う醜い娘がいました。なかなか興入るの機会に恵まれませんでした。清水観音のお告げで、津軽の外ヶ浜で炭焼きをしている藤太のところへ嫁げと言います。福姫は一人津軽へ旅立ちます。はるばる津軽へと足を踏み入れたところで川の流れで顔を洗いました。そこで拾った杉の葉を楊枝にしてお歯黒をつけようと鏡を覗き込むと、驚いたことに世にも美しい娘に変じていました。やがて炭焼き藤太と出会い結ばれます。この藤太、じつは藤原一族の流れを引く高貴な出ででしたが、外ヶ浜に落ち延びて炭焼きに身をひそめていたのです。藤太と福姫は、津軽の豪族となって幸せに暮らしました。娘が顔を洗った川は「美人川」、お歯黒をつけた楊枝の葉は巨大な杉の木となり、今も羽黒神社の境内に残っています」



五所川原須恵器窯跡 1

この窯跡群では、これまでに39基の窯跡が発見され、日本列島最北の須恵器窯として知られています。遺跡は大字名(一部小字名)によって5つの支群に分けられ、その総称として「五所川原須恵器窯跡」と呼んでいます。9世紀後半～10世紀に操業していたと考えられます。現在、保存状態のよい13か所が国の史跡に指定されています。

野尻(4)遺跡 2

この遺跡からは、9世紀～10世紀中ごろの遺物が発見されています。そして、この遺跡を形成した集団は、津軽地域に入植してきた開拓的な人々であったと考えられています。また、表面に馬の絵を描いた土師器鉢が出土しています。この文様は擦文土器(近世アイヌ時代以前に北海道で最後に使用された土器)の文様をベースにしていると思われる、北海道から渡海した人が描いたものと考えられています。

高屋敷館遺跡 3

この遺跡は、9世紀後半～12世紀前葉まで連続して営まれた遺跡で、10世紀後半ころに集落全体が大規模な空壕と土塁で囲まれた構造へと大きく変容しました。そして、最大の特徴は、土塁が壕の外側に作られていて、西日本の弥生時代の環濠集落に似た構造になっているところにあります。壕も大規模なものが廻らされ、まさに防御制集落の典型といわれています。

山元(3)遺跡 4

この遺跡からは、平安時代の竪六住居跡49軒などのほか、須恵器大甕埋設遺構が2基検出されています。この遺構は集落の中央で検出され、深さ40～50センチほどの土坑に埋設されていました。須恵器の大甕は五所川原産のものです。9世紀～10世紀前半にかけての農業集落と考えられています。

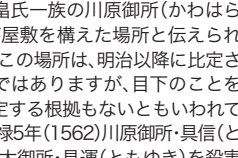
源常館跡 5

最後の浪岡城主北畠顕村の叔父といわれる源常顕が、浅瀬石の押えとしてここに居を構えていたと伝えられています。



伝川原御所跡 6

浪岡北畠一族の川原御所(かわはらごしょ)が屋敷を構えた場所と伝えられています。この場所は、明治以降に比定された地点ではありますが、目下のことをこれを否定する根拠もないといわれています。永禄5年(1562)川原御所・具信(ともゆき)が大御所・具運(ともゆき)を殺害するというクーデター事件(川原御所の乱)が起こりました。川原御所はその後、大御所の弟・顕範(あきのり)らの反撃をうけて殺害され、クーデターは失敗に終わりました。



伝北畠墓所 1 7

伝北畠墓所 2 8

浪岡城主北畠一族の墓(「北畠累代の墓」と、その分家の北畠守親の墓であると伝えられています。現在、いづれの墓所にも五輪塔の一部が残り、「北畠累代の墓」の方には、平成10年度に石碑が建てられました。



浪岡八幡宮 9

坂上田村麻呂の勧請により、祠が建立されたのが始まりとされています。浪岡北畠氏の崇敬をうけ、社殿の修繕などが行われました。藩政時代

